

# マラヤーラム文字

山下 博司

マラヤーラム文字は、タミル語の文字にとても似ています。それもそのはず、マラヤーラム文字の成立に、グランタ文字とともにタミル文字が深くかかわっているのです。しかし、マラヤーラム語では、文字の総数はタミル語に比べはるかに多くなっています。それは、マラヤーラム語が、ほんらいドラヴィダ語族に属するにもかかわらず、サンスクリット語の強い影響のもとに発達し、サンスクリット語からそのまま借用した語彙も少なくないため、サンスクリットの音韻を忠実に反映させるための文字体系となっていることによります。同じ理由で、タミル語には見られなかった「合わせ文字」もたくさん存在します。マラヤーラム語もタミル語などと同じように、単語ごとに分かち書きするのが原則ですが、そのルールは必ずしも厳密なものではありません。

母音字は、日常的に用いられるもので13ほどにのびりますが、補助記号を用いて作られるものがあるので、文字の種類としては厳密には9文字といったところです。これに対し、子音字は36文字を数えます。一般に文字の表記法は簡略化される傾向にありますが、母音記号の形やつけ方をめぐって、新旧いくつかの方法が今も併行して行われています。こうした文字表記のばらつきは、文字数の多さとともに、初学者の文字習得の障害になっています。

ケーララ州は、他の州にもまして現地語による出版活動が盛んです。マラヤーラム語による日刊紙『マラヤーラ・マノーラマ』は、発行部数100万部以上を誇り、英字紙『タイムズ・オブ・インディア』に次いで、インド第2の発行部数を維持しています。

「こんにちは」を意味するマラヤーラム語の表現を強いて挙げるとすれば、「ナマステー」や「ナマスカーラム」がそれに当たるとでしょう。しかし、これらはサンスクリット語に由来する表現で、マラヤーラム語に独自のものではありません。「ナマステー」は親しい間柄や対等な相手、子供などに対して用いられます。「ナマスカーラム」のほうは、それ以外の相手や不特定多数の人々に対して用いられることが多く、テレビやラジオのニュースの挨拶でもふつう「ナマスカーラム」が用いられます。ただし、どちらの表現もあまり日常的ではありません。

നമസ്കാരം  
namaskāram

ふつうの挨拶を自然なマラヤーラム語で表現するとすれば、たとえば「ピンネ・エンドーツケユンドゥ」とか「イェンドゥンドゥ・ヴィシェーシャム」という言い方があります。どちらも「なにか変わったことはあるか？」を意味する表現です。簡単に「スカマノー」(=元気がい?)と言うこともできます。便利な口語表現として「イェンレ」という言い方があり、会ったときにも別れるときにも用いられます。日本語でいえば、「やあ」とか「じゃあ」といったところです。

数字は、特殊な出版物を除き、算用数字しか使われていません。

## [参考文献]

- 家本太郎「マラヤーラム語」、『言語学大辞典』、第4巻、三省堂、pp.152 - 153, 1991.
- 中西亮「マラヤラム文字」、『世界の文字』、みずうみ書房、pp.42 - 43, 1990.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社2001, pp.194-195より転載)